

石見銀山周辺で見られる草花 ～春～

ウツギ (ユキノシタ科) [木本]

晩春のころ、5 枚の花弁をもつ白色の花が密に咲きます。名の由来は、陰暦の卯月（4 月）に咲く花の意味とも、幹が中空であることともいわれています。「卯の花のにおう垣根に ほととぎす早も来啼(な)きて 忍音(しのびね)もらす 夏は来(き)ぬ」と歌われている卯の花は、この植物です。



ウマノアシガタ (キンボウゲ科)

茎の先に直径 1.5～2cm の 5 枚の花びらからなる黄色い花をつけます。かつて馬に蹄鉄を打たなかった頃、蹄が傷つかないように“馬わらじ”が着けられていました。花の輪郭が馬わらじに似ているために名付けられました。有毒植物ですが、空洞になった茎を吹いて笛として遊ぶことから、ピッピグサ、ビッピバナの名前でも親しまれています。



カキドオシ (シソ科)

春頃、立ち上がった茎の先に紫色の花を咲かせます。下方の唇状のところには濃い紫色の斑紋が入っています。つる性の茎が伸びて、垣根を越えて隣の家へと侵入する様子から、“垣通し”の名があてられました。花のついた茎先は天ぷらなどで食べることができます。



キツネノボタン (キンボウゲ科)

春から初夏にかけて黄色い花をつけ、その後、金平糖のような円球状の実をつけます。田の畔や溝など湿ったところでよく見かけます。葉がボタンに似ているのに（少し似ている程度ですが）、全く違う花がつくことから、キツネに化かされたような感じを受けて、“キツネ”という言葉が冠されたといわれています。



クサイチゴ (バラ科) [木本]

4～5 月に白い大きな花をつけます。中には多数のおしべと雌しべがあります。その後、小さな粒が集まった、赤い実をつけます。キイチゴの仲間で落葉の低木ですが、草のようなので“クサ”の名前が頭についています。



シャガ (アヤメ科)

4～5 月に、幅 4～5cm の淡白紫色の花をつけます。花は朝開いて夕方にはしぼみます。3 倍体植物（染色体の数に異常を生じたものです）なので果実はできず、根茎を伸ばして増えます。古い時代に中国から渡来したともいわれています。



ツルカノコソウ（オミナエシ科）

谷沿いや木陰などやや湿った場所に生え、4～5月頃、小さな白い花が集まって咲きます。近縁のカノコソウに似ており、つるを伸ばして増える性質があることから、この名がついたとされます。カノコソウは、淡い紅色の花の様子が、鹿の子の模様を表した“鹿の子絞り”という染め物に似ていることが名の由来とされます。



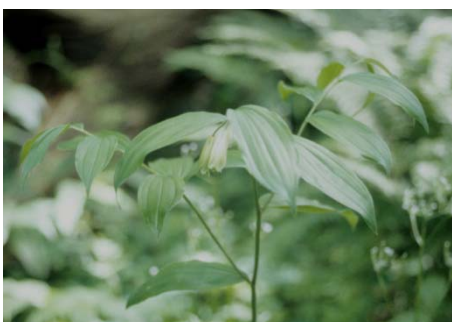
ニセアカシア（別名：ハリエンジュ）（マメ科）〔木本〕

北米原産で、緑化用に各地で植栽され、現在では広く野生化しています。落葉性の高木で、高いものでは20mにもなります。4～6月に、白い花が密に集まった、フジに似た房状の花序を枝から垂らします。花は蜜の量が多く、はちみつをとる養蜂で重宝されており、くせのない蜂蜜がとれるそうです。その反面、外来種である本種が広がり、生態系が脅かされる問題も生じています。



ハウチャクソウ（ユリ科）

4～5月に、枝の先に垂れ下がるように、3cm前後の緑白色の細長い釣鐘状の花を3～5個つけます。寺院や仏塔の四隅に釣られる鐘のような装飾品を“宝鐸（ほうたく、ほうちゃく）”といい、これに似た花をもつことが名の由来とされます。茶花としても愛でられます。



マムシグサ（サトイモ科）

4～5月に淡緑色から淡紫色の花（仏炎苞といいます）をつけます。名の由来は、仏炎苞が鎌首をもたげ舌を出しているマムシに似ていること、茎のように見える部位（偽茎といいます）のまだら模様がマムシの模様に似ていることなどとされます。球根が細く小さいうちは雄ですが、太く大きくなると雌になるという、性を転換させる風変わりな性質をもっています。秋になると、密についた赤い果実が目立ちます。



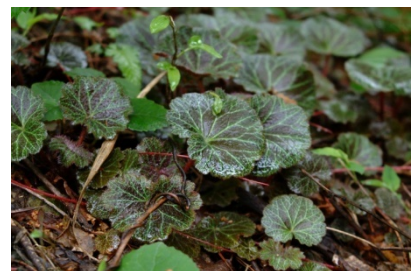
ミヤマカタバミ（カタバミ科）

早春3～4月に、直径3～4cmの白い花をつけます。日が陰った時などに折り畳まれた葉のかたちが、片側が食われた（食(は)む）ように見えることから、“かたばみ”の名がついたとされます。



ユキノシタ（ユキノシタ科）

葉身は長さ5cm前後の腎円形で、厚くてやわらかいです。5～6月、20～50cmに伸びた花茎に、白い花を多数、円錐状につけます。花びらは5枚で、上の3枚は小さく濃紅色の斑点が目立ち、下の2枚は1～2cmと長いのが特徴です。名の由来は、冬でも雪の下で葉が枯れずに残ること、葉の白い斑を雪に見立てたこと、あるいは、垂れ下がった白い花弁を“雪の舌”と見立てたことなど、いろいろな説があります。古くから身近な山菜としても親しまれ、葉が天ぷら、あえもの、おひたしなどに用いられます。



石見銀山周辺で見られる草花 ～夏～

ウバユリ（ユリ科）

7～8月に、まっすぐに伸びた緑色の茎の先に、テッポウユリに似た緑白色の花を数個つけます。花が咲く頃には、茎の下側の葉が枯れることが多く、これを葉(歯)の少ない姥(うば)に見立てたことが名の由来とされます。



エゴノキ（エゴノキ科）[木本]

北海道から沖縄まで分布し、山地や丘陵地でよく見られます。5～6月に新枝の先に白色の美しい花が1～6個垂れ下がってつきます。最近では公園などにも植栽されています。果実にはエゴサポニンという成分を含んでいて、古くは若い実をすりつぶして石けんがわりにしたり、川に流して魚取りに使ったりしていました。



オオバギボウシ（ユリ科）

7～8月に、高さ60～100cmの花茎の先に、薄紫色のろうと型の花を複数つけます。昔の橋の欄干の柱には、ネギ坊主のような飾りがついていましたが、これを“擬宝珠(ぎぼうし)”といいます。つぼみが、この擬宝珠に似ているために、この名がついたといわれています。葉の形も擬宝珠に似ている感じもします。



ヤブカンゾウ（ユリ科）

7～8月にユリに似た八重咲きの橙赤色の花を数個つけます。万葉集で大伴旅人が「わすれ草 わが紐に付く 香具山の 故(ふ)りにし里を 忘れむがため」と読んだ“わすれ草”は、この植物だと考えられています。太宰府に行くことになった旅人が、「忘れ草を身につけておくと憂いを忘れる」という中国の故事にならい、忘れ草を身につけて恋しい都を忘れようとしたといわれています。春の新芽は山菜として重宝され、生食、おひたし、天ぷらなどに用いられます。なお、漢方薬のカンゾウ(甘草)は、中国産のマメ科の植物で、本種と混同されますが、異なる植物です。



ヤブデマリ（スイカズラ科）

高さ6mほどの落葉性の低～小高木です。5～6月、枝先に直径5～10cmの花の集まりをつけます。花びらのように目立つ部分は装飾花と呼ばれる飾りで、雄しべと雌しべをもった花(両性花といいます)は小さく、中心のクリーム色の部分に集まっています。



石見銀山周辺で見られる草花 ～秋～

アキチョウジ (シソ科)

山地の半日陰に生える多年草で、9～10月頃、紫色の筒状の花を多数つけます。和名の由来は、花のかたちが、インドネシアにあるチョウジという木の花に似ていることによるそうです。チョウジ(丁子)のつぼみを乾燥させたものはクローブという香料で、江戸時代にはすでに万能薬として市販されていたそうです。



ゲンノショウコ (フウロソウ科)

乾かした本種を煎じて飲むと下痢止めなどの薬効があり、古くから薬草として用いられてきました。薬草であるか否かの証拠が「薬効」であり、飲むと必ず薬効が現れることから「現の証拠」と呼ばれるようになったそうです。江戸時代の書物には、すでに本種の名前が出てきています。



イヌタデ (タデ科)

アカマンマ(赤飯)の名でも親しまれている植物です。ままごとの材料に使った方も多いのではないのでしょうか。ヤナギタデという近縁の種は葉に辛みがあり、タデ酢などに用いられます。イヌタデの名は、葉がヤナギタデに似ているのに辛みが無く、役に立たないという意味です。



シラネセンキュウ (セリ科)

山地の林縁や流水のほとりなどに生える多年草です。秋、白色の小さな花を多数つけます。中国から渡来した生薬「川芎(せんきゅう)」に似ていて、本種が白根山の山麓で発見されたことから、名がついたとされます。



キバナアキギリ (シソ科)

黄色いキリに似た花を、秋につけることが名の由来とされます。漢字では「黄花秋桐」となります。雄しべ4個のうち2個は退化していて目立ちません(下側の不完全な葯)。虫が花の中にもぐり込んで退化した葯を押すと、上の完全な葯がシーソーのように下がり、花粉が虫の背中につきます。



ハナタデ (タデ科)

林の中や森のへり、山里の道ばたなどに生えています。名は華やかそうですが、薄紅色の花はまばらで、やや名前負けしそうな感じです。イヌタデとよく似ていますが、花がぎっしりとついているので見分けることができます。



マユミ（ニシキギ科）〔木本〕

枝がよくしなり、弓の材料としていたことから名がついたとされます。漢字では「真弓」となります。秋も終わりに近づくころ、果実は淡紅色になります。熟すと4つに割れ、橙赤色の種子が出てきます。材は象牙色で緻密で、現在でもこけしなどの木工品に用いられています。



ヨウシュヤマゴボウ（ヤマゴボウ科）

北アメリカ原産の帰化植物で、明治初期に渡来しました。高さ1～2mにもなる多年草で、空き地や道ばたなどで普通にみられます。果期には黒紫色に熟した実を房状に垂らします。果実をつぶすと紅紫色の汁が出て、アメリカではインク・ベリー（ink berry）と呼ばれています。根はゴボウに似ていますが有毒です。



ミズヒキ（タデ科）

茎には小さな花がまばらについています。花の色は、上半分が赤色、下半分が白色です。進物用の包み紙に用いられる紅白の水引の色合いに見立てて、この名がついたと言われている。葉は楕円形で、逆V字型の黒斑があるものが多いのも特徴です。



ミゾソバ（タデ科）（別名：ウシノヒタイ）

田の畔や溝など湿ったところに生えます。7～10月、枝の先に小さな花が10個前後集まって咲きます。溝のような水辺に生え、花や葉の样子が“蕎麦(そば)”に似ていることから名付けられたとされます。別名は、葉の形が“牛の額”に似ることによるものです。

